

従軍画家瀬野覚蔵とその戦地記録画 —戦前絵葉書による美術史拾遺—

彭 国 躍

1. はじめに

戦争画は、広く解釈すれば、戦争とのかかわりの中で制作された絵画である。日本においては一般的に GHQ に没収された戦争記録画（153 点）が想起され、いわゆる「大東亜戦争」という文脈の中で議論されることが多い。そのため、戦争責任の問題が絡み、長く封印されてきた経緯がある。戦後、戦争画と従軍画家に関する史実は、当事者の画家たちが亡くなるにつれその多くが消え去っていった。その意味において、日本における戦争画の議論は、153 点の作品の問題だけではなく、従軍した画家の一人ひとりにまつわる多くの具体的な史実の発掘研究が先行する必要がある。

日中・太平洋戦争の最中、多くの画家たちは、戦争記録画を制作する目的で中国大陆や東南アジアなどに派遣されていた。従軍画家たちが具体的にどのような移動経路をたどり、どこでどんな風景を目にし、何を描いていたかは、従軍日記やスケッチが残されたごく一部の画家以外はほとんど知るすべもないと思われていた。図版の収集と確認がきわめて困難となったいまでは、かつて軍事郵便として発行された絵葉書は大切な手掛かりの 1 つとなっている。

彭（2013）は、戦前の軍事郵便絵葉書を手掛かりに、南薫造、小林万吾、鈴木貞三の従軍記録画について考察したが、本論は、同時期の洋画家瀬野覚蔵にフォーカスをあてる。瀬野覚蔵は戦時中派遣された 200 名を超える従軍画家の中のひとりである。彼は 1940 年に交通事故で亡くなったこともあり、いまではその名前が戦前の戦争画制作者リストに載る以外はほとんど忘れ去られている。従軍画家が提出した大量の戦地記録の原画は空襲など大戦混乱の中ほとんど行方不明となった。本論では、戦前絵葉書の収集、整理を通して、従軍画家瀬野覚蔵の作品図版を発掘し、その画題内容の分析を通して、彼の従軍活動の一部に光をあて、戦前美術史の闇に埋もれたほんの一かけらを拾い上げたいと思う。

2. 瀬野の経歴、出品作と従軍記録

瀬野覚蔵の生い立ちについて、その多くは不明である。文献調査で得られた情報に基づき、次のようにそのプロフィールの一部をまとめることができる。彼は 1888 年（明治 21 年）に京都に生れ、初めは明治後期から昭和初期にかけて関西で活躍していた洋画家松原三五郎（1864～1946）の門に入っていたが、後に上京し白馬会研究所において黒田清輝（1866～1924）、岡田三郎助（1869～1939）に師事した。1914 年から度々中国を訪れ、その成果として 1922 年に『覚蔵滞支記念画集』が出版された⁽¹⁾。日中戦争の間には従軍画家として中国に派遣されていたが、従軍時代の瀬野の活動は、複数の文献から得られた断片的な情報を時代順に整理すると、次のようになる。

1937 年 戦争画「突撃」制作のため 2 度にわたり中国上海戦線に視察に行く⁽²⁾。

1938 年 2 月 軍部の計らいで約一か月中国戦場に赴く。

1938年4月 古城江観、鶴田吾郎、寺本忠雄、等々力巳吉、向井潤吉などと共に「大日本陸軍従軍画家協会」結成に加わる。

1938年12月 大野隆徳、佐々貴義雄、鳥海青児、吉田博と共に、陸軍省による中国の華中、華東地域（「中支」）への嘱託派遣従軍画家リストに名を連ねる⁽³⁾。

1939年3月 石井柏亭、伊原宇三郎、中沢弘光、中村研一、向井潤吉など41名の会員と共に、第2回大日本陸軍従軍画家協会展に出品する。

1939年7月 石井柏亭、片岡銀蔵、川島理一郎、小磯良平、鹿子木孟郎など127名と共に、日本美術報国会『聖戦画譜』にその作品の図版が掲載される。

1939年8月 清水登之、高光一也、鶴田吾郎、長坂春雄、向井潤吉と共に、武漢攻略戦の戦争記念画を作成するために陸軍美術協会に召集され、委嘱を受ける。

1940年2月 陸軍省嘱託として南寧、北海、海南島、広東などの各戦線を歴訪し、4月下旬帰還する。

1940年5月3日 西銀座数寄屋橋の近くで「自動車で疾走中」交通事故に遭い、翌日早朝病院で亡くなる⁽⁴⁾。

戦前美術展覧会に出品した瀬野の出品作を下表のようにまとめる。

表⁽⁵⁾

開催時期	画展	作品
1910年（明治43年） 10月14日～11月23日	第4回文展	「浅間山」
1911年（明治44年） 10月14日～11月19日	第5回文展	「白い原」
1912年（大正元年） 10月12日～11月17日	第6回文展	「高山の一部」
1926年（大正15年） 10月16日～11月20日	第7回帝展	「よそおい」
1927年（昭和2年） 10月16日～11月20日	第8回帝展	「ジャンク」
1928年（昭和3年） 10月16日～11月20日	第9回帝展	「青春」
1934年（昭和9年） 10月16日～11月20日	第15回帝展	「石窟」
1936年（昭和11年） 10月16日～11月3日	文展・鑑査展	「七月のある日」
1938年（昭和13年） 7月7～13日	大日本陸軍従軍画家協会第一回展	「光華門戦跡」*「中華門戦跡」「玄武湖と紫金山」*「和平門」*「南京城の鼓楼」*「蘇州風景」*「燕湖北廣濟寺」*
1938年（昭和13年） 10月16日～11月20日	第2回新文展	「第一線」
1939年（昭和14年） 3月7～12日	大日本陸軍従軍画家協会第二回展	「戴家山攻撃」*
1939年（昭和14年） 7月6～23日	聖戦美術展第一回展	「文化を守る慈眼、顕光、悲手」「捨てられたる塹壕」*「黄坡」*
1939年（昭和14年） 10月16日～11月20日	第3回新文展	「大同の子供等」

（*は図版未確認作品である）

表で明らかのように、瀬野は生前文展、帝展などに数多く出品し、当時日本美術界の第一線で活躍していた。そして、1938 年以降出品が増えると同時に戦争にかかわる画題（戦跡、第一線、攻撃、塹壕）や中国地名が多く登場していたことが明らかである。瀬野の作品に反映された中国の地名には現在江蘇省の南京市（光華門、中華門、和平門、南京城鼓楼、玄武湖と紫金山）、蘇州市、鎮江市（戴家山）、安徽省の蕪湖市、山西省の太原市（黄坡）、大同市が含まれる。1938 年 7 月と 1939 年 3 月の出品作には現在華東地区（江蘇省、安徽省）の地名が登場し、1939 年 7 月と 10 月の出品作には華北地区（山西省の大同、黄坡）の地名が登場していることが分かる。瀬野が 1938 年と 39 年の間に華東と華北の両地域を移動したか、または 2 回に分けて訪れた可能性がある。両地域が（大同と南京の間の場合）約千キロも離れているので、仮に別々に訪れたとすると、1 回目は江蘇省の南京、蘇州などの華東地区、2 回目は山西省の大同、黄坡などの華北地区ということが想定される。記録にあった 1938 年の従軍は陸軍従軍画家協会第 1 回展の内容と密接に関係していることは明らかであるが、山西省への従軍は具体的にいつごろかは記録に残されていない。あったとすれば 1938 年 7 月から 39 年 6 月までの間ではないかと推測される。

以上は、筆者が文献調査で得られた瀬野覚蔵に関する情報を整理したものであるが、これから筆者が収集した資料の中から瀬野が原作者となる軍事郵便の絵葉書の整理を通して、彼の戦地記録画の取材内容とその活動経路について考察する。

3. 戦前絵葉書に残る瀬野の従軍記録画図版

南薫造の『従軍日記』には従軍出張の帰りに慣例の約束が 2 つあったことが記されている。「旅行中に獲たる画題によ里六十号画布に一画を作りて陸軍省に寄贈する事。絵葉書作製の為め其の材料を一時貸與する事の二つ也」（藤崎 2005 p20 表記は原文通り）。そこから従軍画家は、旅行中軍部から資金援助を受け様々な便宜を図ってもらうかわりに従軍後に大型の作品を軍部に寄贈し、軍事郵便用の絵葉書画題を提供していたことが分かる。瀬野は最終的にどのぐらいの画題を提供し、うち絵葉書として何枚採用されたかは定かではないが、筆者が集めた 95 名の従軍画家による絵葉書（531 枚）の中で瀬野覚蔵（蔵、造）による図版は 15 枚発見されている⁽⁶⁾。これらの図版を地域、時代と画題によって次のように整理することができる。

まずこれらの作品を、そこに描かれた場所に基づいて 3 つの地域に分けることができる。1 つは広東を中心とする華南地域である。華南地域が背景となる絵葉書は最も多く 12 枚見つかった。「広東珠江河畔風景」「広東風景」「広東中山記念堂」「六榕寺」「観音山五層楼の一部」「南支風景」「花塔のある寺院」「南支寺院の門」「蛋民船の栈橋」「広東珠江の蛋民船」「観音山砲台」と「軍橋警備」である。「軍橋警備」の図版から明らかな地域情報は読み取れないが、「観音山砲台」との図版構成、色調の類似性に基づき、同じ従軍時期の作品だとすれば、華南地区の可能性が高いと推定する。2 つ目は華中地区である。この地域にかかわる絵葉書は 2 枚見つかった。「武昌武汉大学」と「漢口黄坡附近」⁽⁷⁾である。3 つ目は華東地区で、「南京城夜襲」の 1 枚である。

そして、創作取材や従軍の時期に基づいて整理すると、華東の南京にかかわる図版は 1937 年の創作取材の時、華中の武昌、漢口にかかわる図版は 1938 年華中地区従軍中に、そして広東にかかわる 12 枚の図版は 1940 年 2 月～4 月の華南地区従軍中にそれぞれ描かれた（またはその時のスケッチに基づいて描かれた）ものではないかと推定される。華南地域従軍取材の内容は、彼が帰国一か月後に急死したため、絵葉書に残る図版以外は、表を見ると分かるように、画展出品作として世に出るものはなかった。

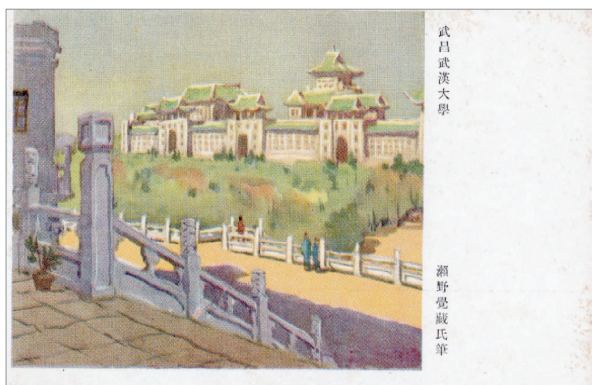
さらに、発見された 15 枚の絵葉書図版をその画題内容に基づき大きく「建築風景」、「生活風景」と「戦場風景」の 3 つに分けることができる。そのうち 8 枚は建築風景、2 枚は生活風景、5 枚は戦場風景

である。以下は画題内容の分類に沿ってそれぞれの図版を確認しながらその内容について考察する。

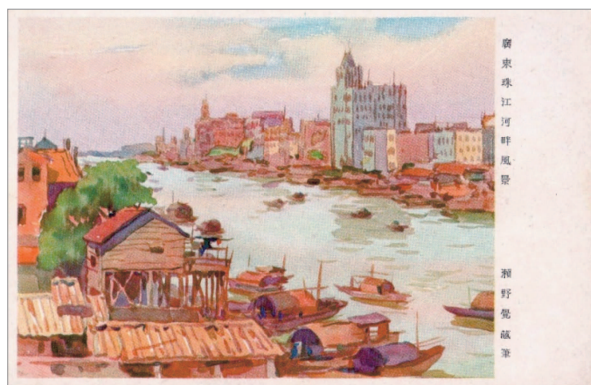
3. 1. 建築風景

建築風景の中で建物の全体像が見える遠景のものは2枚である。その内1枚には湖北省当時の武昌県に位置する武漢大学の建築群がパノラマ写真のように描かれている⁽⁸⁾。正確な制作時期は不明であるが、1938年10月日本軍による武漢攻略の時期を考えると、瀬野が従軍していた同年12月頃に描かれた（またはその時のスケッチに基づいて制作された）可能性が高い。もう1枚には広州市内を流れる珠江河畔の建築風景が描かれている。対岸の遠景には近代的な建築が立ち並ぶ広州バンド、中景の河川には水上の輸送船、近景には木造アパートの屋根が描かれている。この広州珠江バンドの風景は外の従軍画家池田実人、石川重信、小早川篤四郎にも描かれている。

残り6枚の近景はいずれも広州市とその周辺の建築風景である。縦の構図、屋根、軒下、門柱、人物点景などの画面構成から共通の特徴が見られ、シリーズとして描かれたのではないと思われる。③「広東中山記念堂」は孫文記念館の一部を描いたものである。1931年に建てられたこの建築は外の従軍画家川島理一郎、橋本八百二、小室孝雄が提出した画題にも描かれ、中国南方に従軍した多くの画家たちを引き付けた景観の1つと言える。④「観音山五層楼の一部」は、広州市内にある明代建築で別名越秀山鎮海楼の一角を描いたものである。⑤「六榕寺」は6世紀南北朝時代に建立された六榕寺境内の一角である。六榕寺は従軍画家小室孝雄にも描かれている。⑥「広東風景」はその画面中央の額に「国画研究会」と記されているので、1926年に成立し、当時広東ないし中国で最も影響力のある民間美術団体の1つ「国画研究会」の所在地が描かれている。六榕寺近くの人月堂ではないかと推定される。⑦「南支寺院の門」と⑧「花塔のある寺院」は具体的な場所を特定しかねるが、おそらく同じ時期に描かれた広東地域の風景であろう。経年による汚れや退色にもかかわらずこれらの絵葉書図版から原画が持つ色彩の豊かさ、画面の美しさが伝わってくる。



① 「武昌武漢大学」



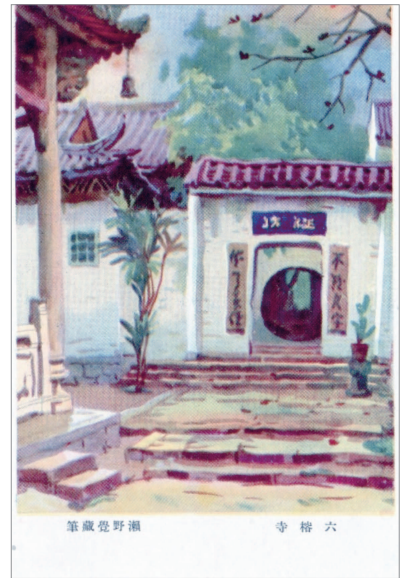
② 「広東珠江河畔風景」



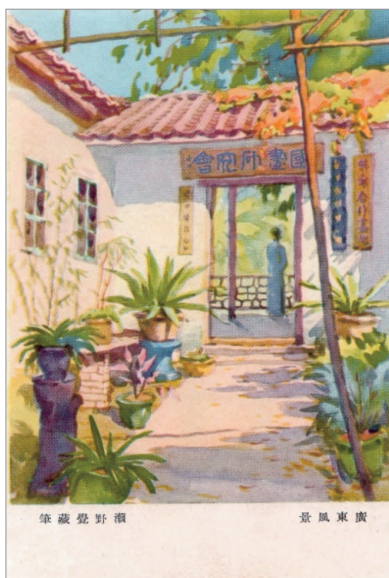
③ 「広東中山記念堂」



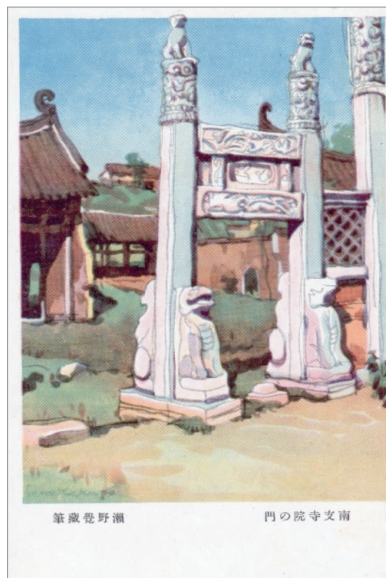
④ 「観音山五層樓の一部」



⑤ 「六榕寺」



⑥ 「広東風景」



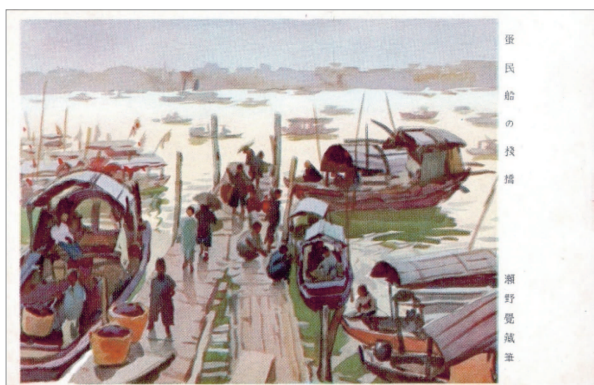
⑦ 「南支寺院の門」



⑧ 「花塔のある寺院」

3. 2 生活風景

生活風景の絵葉書2枚にはいずれも中国南方の水上民の生活が描かれている。当時中国では水上交通が移動や輸送の主な手段の1つで、珠江や揚子江などの主要河川では輸送業で生計を立てる人々は水上集落を作り、船上生活を営んでいた。⑨「蛋民船の棧橋」には棧橋に接岸していた小舟に上下船する人々の様子が、⑩「広東珠江の蛋民船」には船上の生活模様がそれぞれ描かれている。⑩の画面には、食事の支度や洗濯物を干す様子、子供が背負っている浮き袋、七輪とその周りの風除け板など当時の水上民の日常生活のワンシーンがリアルに描かれている。広州占領は1938年10月頃なので、船上の日章旗と満州国旗には瀬野が従軍した1940年という時代背景が映し出される。水上民の生活は、従軍画家向井潤吉や池田実人が描いた軍事郵便絵葉書にもモチーフとして選ばれ、日本になかった光景のため多くの従軍画家に興味を持たれたのかもしれない。



⑨ 「蛋民船の棧橋」



⑩ 「廣東珠江の蛋民船」

3. 3 戦場風景

瀬野が描いた戦場風景の図版は5枚発見されているが、うち1枚は⑪「南京城夜襲」である。日本軍の南京攻略の開始は1937年12月10日頃である。瀬野の戦争画作品「突撃」の創作も1937年、そして1938年7月出品した陸軍従軍画家協会第1回展には南京での戦いに関する作品が多数出品されたということに合わせて考えると、彼は37年末から38年初頭にかけてのある時期に戦場に赴いた可能性が高い。そして、絵葉書⑪の原画は、その時の記録画として描かれたのではないかと推測される。砲撃の炎、破壊された城壁、伏撃の兵士などがスケッチタッチで描かれ、画面から戦闘の臨場感が伝わり、戦場カメラのような記録性が強く感じられる。

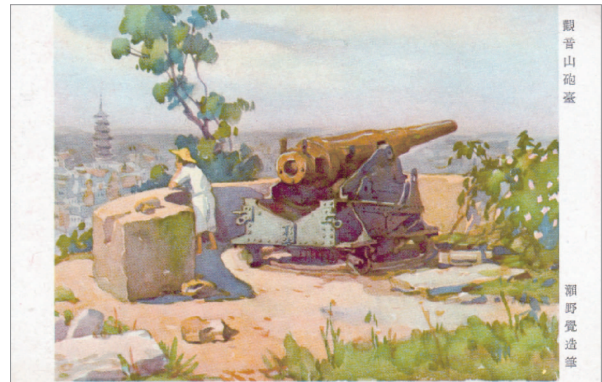


⑪ 「南京城夜襲」

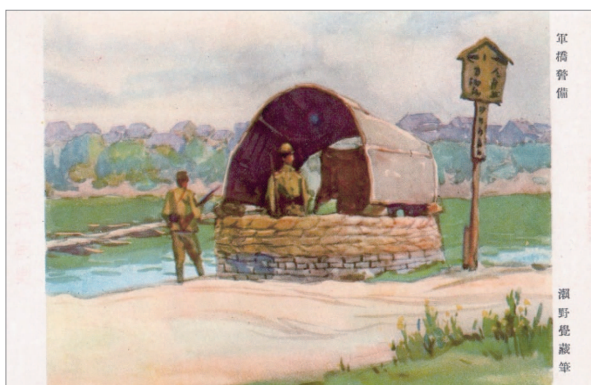
残りの4枚は戦跡の情景が描かれているが、うち⑫「漢口黄陂附近」には画面左中央の山頂か高台に一匹の馬が描かれている。漢口の戦いは武漢三鎮（武昌、漢陽、漢口）攻略が行われた1938年10月頃である。⑫は、戦闘の後に残された一匹ということを考えれば、主人を亡くした軍馬という意味で描かれたのだろう。地上一面に散乱した軍服、ヘルメットや武器などは戦いの激しさと戦争の犠牲を暗示しているように見受けられる。⑬「観音山砲台」には画面中央の砲台と景色を眺める点景人物が描かれ、戦闘が一段落したことを思わせる画面構成である。⑭「軍橋警備」には警備中の兵士の姿、⑮「南支風景」には駐屯地の民家の庭で休む軍馬と兵士に見える人物がそれぞれ描かれている。



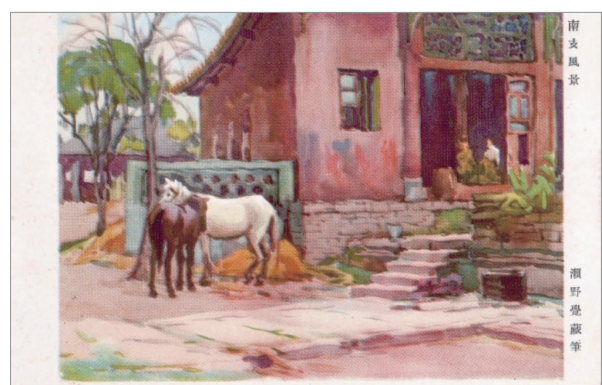
⑫ 「漢口黄坡附近」



⑬ 「観音山砲台」



⑭ 「軍橋警備」



⑮ 「南支風景」

4. 結び

以上で従軍画家瀨野覺蔵が描いた軍事郵便絵葉書の図版を発掘，整理し，その内容について考察した。これらの絵に対する見方や視点はいろいろあり得るが，どんな立場を取るにせよ時代背景を踏まえる必要がある。日中戦争の直前の1938年5月に「国家総動員法」が成立し，日本社会全体が戦争に傾く中，美術界もその例外ではあり得なかった。同じ時期に陸軍美術協会や海軍美術協会が相次ぎ成立し，大量の画家が動員され，一部は従軍画家として戦地に送られた。当時戦備のため日本国内の物資が著しく不足し，食料などの生活必需品だけではなく絵具まで配給制となり，多くの画家，特に洋画家たちにとって創作活動の環境が急激に悪化した。当時の陸軍少佐鈴木庫三の以下の発言から絵具の配給と創作活動への圧力との関係の一端が垣間見える。

「私は新聞雑誌方面で，紙は商品にあらずということを説いた一人である。単なる商品にあらず，思想戦の弾薬なり，……今度はもう一歩行くと絵具は単なる商品にあらずということを言いたいと思う。言う事を聞かないものには配給を禁止してしまう。又展覧会を許可しなければよい。そうすれば飯の食い上げだから何でも彼でも踰いて来る」(「みづゑ」434号1941年1月，針生 2007 p248)

当時の陸軍大尉山内一郎が『美術』(1944年第5号)に寄せた文章「作戦記録画のあり方」の中でも同様に戦争画作品の創作内容についてきびしく注文を付けた。

「純芸術的立場からする画家の制作感興のみの取り扱われたものを必要としないのである。……国民

の戦意を昂揚すると言う点から、国民を圧戦思想に導入するような、例えばジェリコー⁽⁹⁾の好んで描いた傷兵とか、……発表に支障を来す場合のある事も計算の内へ入れられなければならない」(山内 1944 p5)

これらの発言から当時の従軍画家たちがいかに検閲で作品が反故にされる危険性を意識しながら創作にあたっていたかが容易に想像できる。そして、戦後、日本の戦争画処理にかかわった当時米国デトロイト美術館の学芸員シャーマン・リは次のように評していた。

「これらの絵は言うまでもなく宣伝の目的で描かれている。その目的から見れば効果的だと考えられる。アメリカの戦争画と比較すると、日本の戦争画は、勝利の場面とか戦争の光栄ある場面を強調する傾向がある」(「米人の眼に映った戦争画」『朝日新聞』1946年9月16日朝刊2面)

シャーマン・リの評価はある意味では鈴木庫三や山内一郎の発言を裏付けるもので、多くの戦争画が軍部のプロパガンダの産物であったことを物語っている。

しかし、それはあくまでもシャーマン・リが見たような、きびしい検閲の下で制作され、戦争画と銘を打った戦争美術展出品作についての評価である。瀬野覚蔵を含め、従軍画家たちが残した大量の絵葉書図版を見ると、必ずしも「戦争の光栄ある場面」とは言えないものが多く含まれる。芸術作品が検閲制度の中で政治的批評に晒されるという時代的背景を考えると、従軍画家展や聖戦美術展の出品作(例えば瀬野の「突撃」)よりも、絵葉書の画題として提供されたような小品の方が、より画家の芸術創作のプロセスを反映し、軍部が求めたプロパガンダとの距離を取ろうとしたり、自ら表現したいものを描こうとしたりする痕跡を残しているように感じられる。今回発掘された瀬野の作品図版にも、彼の戦争画展出品作には見られない多くの側面—風景への賛美、庶民生活に向けた眼差し、戦意昂揚とは言えない戦地記録などが見えてきたのではないかと思う。

従軍画家たちが戦争にかかわったことは間違いない。しかし、それが戦争に協力したのか、戦争に巻き込まれたのか、それを正確に評することは容易ではない。戦後日本美術界での追及、批判とその後の長い沈黙も議論の難しさを物語る。中国でも近代絵画の開拓者劉海粟は、1943年5月に日本軍により避難先のシンガポールから上海に連れ戻されたことが日本軍に協力したのか連行されたのかの議論で生涯苦しめられた。芸術家に対してわれわれはその作品の鑑賞を通して得られるものを評することが何より大切である。従軍画家たちが戦時中に描いた作品および作品図版について、その時代背景を踏まえながら、それぞれの創作意図を真摯に読み解く必要があるのではないかと思う。

注

- (1) 鈴木(2009)によれば、京都の芸艸堂に収蔵されている。
- (2) 瀬野覚蔵の「突撃」(油彩 1937年作 360.5 × 542cm)は東京国立近代美術館に無期限貸与作品として所蔵されている。その図版は針生(2007 p7)において紹介されている。
- (3) 「中支」は実質上現在の華東・華中地域を含む活動地域を指す。12月に従軍画家リストに記載されているが、実際出発と帰還の正確な時期は不明である。
- (4) 瀬野のプロフィール情報の一部は『20世紀物故洋画家事典』に、従軍情報は『日本美術年鑑』と『戦争に征った画家たち』に、死亡情報については『東京朝日新聞』1940年5月5日の夕刊訃報欄にそれぞれ基づく。
- (5) 表の出品情報は『昭和期美術展覧会出品目録(戦前篇)』と『日展史』に基づいて整理したものである。

- (6) 名前の漢字表記に「蔵, 藏, 造」の三種類が発見されているが, 同時代の資料調査により別人の可能性はほとんどないので, 表記, 印刷のずれとして扱う。
- (7) 「黄坡」という地名は山西省の太原市にもある。瀬野はそれと区別するために「漢口黄坡」という名をつけたかもしれない。「聖戦美術展第一会展」に出品した「黄坡」は, 同時期「大同の子供たち」も出品されているので, 山西省の「黄坡」を指す可能性がある。
- (8) 14 枚の絵葉書の裏面には「郵便はがき 軍事郵便」が共通に印刷されるが, 発行所は⑪が「陸軍美術協会」でその以外はすべて「陸軍恤兵部発行」, 印刷所は③⑥⑩⑬⑭⑮が「共同印刷株式会社印刷」, ④⑨が「精版印刷株式会社発行」, ①⑤⑦⑧⑫が「東京小林又七印刷」となっている。⑪には印刷所の表示がない。
- (9) デオドル・ジェリコー (Théodore Géricault 1791 ~ 1824) は 19 世紀前半に活躍したフランスの画家である。戦争を題材とする彼の作品には「戦場から去る負傷した胸甲騎兵士官」「メデューズ号の筏」などのように戦争の苦しみや悲しみを表現するものが多い。

参考文献

- 飯野正仁 2005「戦争に征った画家たち」『あいだ』(116 ~ 119 号)「あいだ」の会
- 岩瀬行雄, 油井一人 1997『20 世紀物故洋画家事典』美術年鑑社
- 近藤史人 2002『藤田嗣治―「異邦人」の生涯』講談社
- 桜本富雄 1993『文化人たちの大東亜戦争』青木書店
- 鈴木文子 2009「玩具と帝国―趣味家集団の通信ネットワークと植民地」『文学部論集』(第 93 号) 仏教大学
- 高階秀爾 1996『日本絵画の近代』青土社
- 東京文化財研究所 1969『日本美術年鑑・美術界年史(彙報)』
<http://www.tobunken.go.jp/japanese/nenshi/menu.html>
- 東京文化財研究所美術部編 2006『昭和期美術展覧会出品目録(戦前篇)』中央公論美術出版
- 日展史編纂委員会 1980『日展史』社団法人日展
- 針生一郎他 2007『戦争と美術 1937-1945』国書刊行会
- 藤崎綾 2005「南薫造『従軍日記』」『広島県立美術館研究紀要』17-49
- 『聞蔵Ⅱ』ビジュアル朝日新聞記事データベース: <http://database.asahi.com/library2/main/start.php>
- 彭国躍 2013「南薫造『従軍日記』の図版検証―戦前絵葉書の美術史拾遺―」『神奈川大学評論』(第 74 号)
- 蘭恵 2003『中国名画家全集 劉海粟』河北教育出版社
- 山内一郎 1944「作戦記録画の在り方」『美術』(第 5 号 特輯陸軍作戦記録画)